⑺　ＵＤの視点で捉えた本時の手立て

ａ　学習の流れの見通しを持たせる工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」①と関連）

あいさつが終わると、「今日の流れ」の確認が行われた。一つずつ板書しながら簡潔な言葉で説明が行われた。生徒からの確認もあり、全員で本時の学習の流れを共有することができた。全員が最後まで集中して学習することができた。

図４－７－７
学習の流れの確認

ｂ　本時の課題へつなげる工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」③と関連）

本時の学習に入る前に、既習事項に関する練習問題が用意された。本校３年生の携帯電話会社別の所持数に関する課題であり、関心を持って表づくりに取り組むことができた。

数量を整理し表にまとめる既習事項を確認・復習することで、本時の課題にスムーズに取り組むことができた。

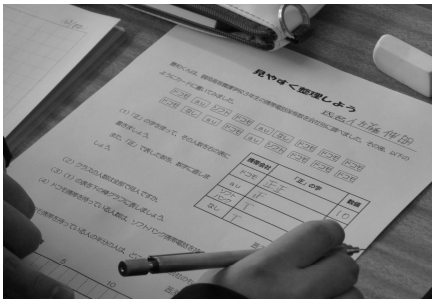

図４－７－８
既習事項の練習問題

ｃ　課題への意欲を高める教材の工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①と関連）

導入時に、写真を見ながら、ゴミ拾い、分類作業、表や棒グラフの作成など、これまでの学習の振り返りが行われた。

それぞれの写真に対する生徒からの発言を基に、ゴミの種類や量について確認することができた。表の数値や棒グラフの長さが示す量と結びつけて考えることができ、実感を持って捉えることができたようである。

図４－７－９
写真を使った振り返り

③　特別支援学校の授業をＵＤの授業づくりの参考に

２つの授業の中に、ＵＤの７つの視点と関連する支援の工夫を見出すことができた。個に応じた教育を前提としている特別支援学校では、本研究が提案している、ＵＤの授業づくりを包含する、きめ細かな教育が実践されている。表面的な「形」だけではなく、授業づくりの考え方も含めて理解する必要がある。ていねいな実態把握による生徒理解、障がい特性に応じた配慮やかかわり方のノウハウなど、高い専門性に支えられて、本時の授業が行われていた。

第５章　研究のまとめ

１　研究の成果

ここで２年間の継続研究の成果を述べる。

⑴　「ＵＤの７つの視点（および各項目）」の作成

第２章の基礎研究を通し、これまでも授業づくりの基礎・基本と呼ばれてきた手立てに、特別支援教育の視点を加味して見直し、「ＵＤの７つの視点」を設定することができた。

学級づくりを土台として、授業づくりを考える構造になっており、前者には「Ⅰ　教室環境」、「Ⅱ　学習や生活のきまり」、「Ⅲ　関係づくり」の３つの視点、後者には「Ⅳ　授業の構成」、「Ⅴ　教師の話し方、発問や指示」、「Ⅵ　板書、ノートやファイル」、「Ⅶ　教材・教具」の４つの視点を設定した。それぞれに４～８個程度の項目を振り分け、「ＵＤの７つの視点一覧表」を作成することができた。特に小学校、中学校、高等学校での活用を視野に入れ、各校種及び実践協力校での試行に共通すると思われる項目を整理することができた。

⑵　授業改善に向かおうとする意欲の向上

第３章に、実践協力校の教員の意識調査についてまとめた。ＵＤの授業実践の取組みを数値的に見ると、それぞれの学校の実態やニーズに合わせた取組みであるため、学校間の違いは見られる。しかし、年度初めと年度後半を比較したときに、取組みの状況がよくなったり、取組みの状況を継続している教員の割合が高くなったりした点は注目すべきであると考える。

また、同じ調査の自由記述の回答では、次のような児童生徒の変容を感じ取っている教員が多数見られた。

表５－１－１　「ＵＤの視点を取り入れた授業づくり」に取り組んで感じた児童生徒の変容

・生徒が授業の時に生き生きしたり、わかったことを表現してくれたりする機会が増えた。 ・低位の生徒の中にも学習する意欲が見られる生徒は増えた。 ・次に何をするのかが目で見てわかり、子ども自身が見通しをもって動けるようになっていると思う。 ・今の学習が何と関連性があって、何を目的にしているのかということが理解できる生徒が増えた。その理解度が自発的・意欲的に取り組んでいる様子になり、行動にあらわれるようになった。 ・机間指導をできるだけ多く行うことや、グループでの活動を要所に取り入れることにより、クラス全員が参加できる授業となった。授業中の質問や発言も多くなった。

実際に、目の前の児童生徒の変容を感じた教員においては、授業改善への意欲は高まっていったと思われる。ＵＤの視点を取り入れた授業づくりを試みることにより、授業改善の具体的な手がかりとして活用できるのではないかと期待される。

⑶　校内研究や研修への取組み方の提案

第４章において、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の授業実践を報告することができた。本研究では、ＵＤの視点を取り入れた授業づくりの研究や研修の進め方のモデルパッケージを作成した。その中で、指導案の書式（指導観や本時の指導過程）の中に、「ＵＤの視点による手立て」を明示すること、事前研究会や事後研究会ではワークショップ型で進めること、授業参観の際には「授業公開シート」を活用することなどを提案した。

実践協力校には、ＵＤの７つの視点が、実際に学級づくりや授業づくりの手がかりとなり得るかどうか、授業実践を依頼した。本報告書に掲載させていただいた授業をまとめてみると、実に様々な校種、学年、教科等を越えた取組みが可能だということがわかった。

表５－１－２　掲載した授業一覧

◇　小学校			
・１年生　算数科	・２年生　学級活動	・３年生　社会科	・４年生　国語科
・５年生　算数科	・６年生　社会科		
◇　中学校			
・１年生　数学科	・２年生　国語科	・３年生　美術科	・３年生　数学科
◇　高等学校			
・２年生（福祉科）　コミュニケーション技術		・３年生（看護科）　看護	
・２年生（普通科）　国語総合			
◇　特別支援学校			
・２年生　家庭科	・３年生　数学科		

これら実践協力校の授業では、実際の教員の授業の進め方や児童生徒の様子を見ることができた。また、ワークショップ型の事後研究会では教科や学年の枠を越えた活発な話し合いの様子を確認することができた。校内研究にＵＤの授業づくりを積極的に取り入れ、全校体制で取り組み、効果を挙げた学校がある一方で、教員２人の教科部会において、授業公開シートを用いて、日頃気軽に実践できる研修に取り組んだ学校もあった。特に、「教科の壁」があるといわれる高等学校においては、校内の異教科の教員が授業参観し、事後研究会で全員が発言をするなど、協働性の高い授業研究会が行われたという成果もあった。その他、各校に共通して、「ＵＤの７つの視点一覧表」をチェックリストとして、普段の授業に活かしていきたいという声が聞かれた。

以上、ＵＤの７つの視点が、校内研究や研修に活用できるという意見をいただくことができたことは、大きな成果と捉えたい。

２　研究の課題

課題としては、大きく分けて、ＵＤの視点を取り入れる上での課題と、研究自体についての課題がある。

⑴　ＵＤの視点を取り入れる上での課題

第２章でも述べたが、ＵＤの視点は「学級の実態や教科の特性、指導場面などに合わせて取捨選択をするべき」もので、それゆえその加減が難しいことが課題に挙げられる。ある実践協力校の事後研究会では、ワークシートに視覚的ヒントを増やした工夫を考えたものの、結果的に内容が盛りだくさんになったり、ヒントが多すぎて生徒の素直な感覚を阻害したりしたのではないかという指摘が出された。また、質問の中に、「どの程度までわかりやすくすればいいのか」、「ヒントはどれぐらい与えればいいのか」、「いつも取り入れていては、自力解決の力が育たないのではないか」などが出された。

現時点としていえることは、学校の児童生徒一人一人の実態把握、教科の特性を踏まえた教材研究などを、しっかりと行うことができる力量が必要で、その上で、ＵＤの視点による手立ての内容を考える必要があるということである。ＵＤの授業づくりを、配慮を要する児童生徒を含め、すべての児童生徒に主体的に学ぶ姿を育て、最終的には児童生徒自身の力で課題解決に向かうことができるような子どもを育てるための授業改善の一助と考える。

⑵　本研究についての課題

本研究は、通常の学級において、すべての児童生徒が「わかる、できる」喜びを実感できるような授業改善を目指し、ＵＤの視点を取り入れた授業づくりについて理解を深めるとともに、授業改善や校内研究に向けてどのように活用できるか、その内容と方法を実践協力校とともに探ってきた。なお、実践協力校にとって仮説検証の研究が大きな負担となることのないように、ＵＤの視点による手立てを試行していただくことを実践研究のねらいとした。「ＵＤで

本当にわかるのか？」、「ＵＤで本当にできるようになるのか？」という問いに対して、現段階において客観的なデータはなく、今後に向けた１つ目の課題といえる。

本格的に、ＵＤの視点を取り入れた授業の効果を評価するには、授業研究において、抽出児童生徒の活動の様子を細やかに分析する、長期間にわたって特定の児童生徒や学級の様子を追跡調査するといった取組みが必要である。

２つ目の課題は、小学校、中学校、高等学校の発達段階に応じて、ＵＤの７つの視点の捉え方が変わってくるということである。視点の項目については、それぞれで必要性が異なることがわかった。そのため、７つの視点と項目については、その共通した項目について精査を行った。今後は、さらなる授業実践を参考にしながら、各校種に対応した「ＵＤの７つの視点一覧表」と「モデルパッケージ」の開発が必要である。特に中学校、高等学校における通常の学級の特別支援教育の推進に向けて、活用できるツールとしたい。

３　研究のこれから

２年間、研究を進めてきた成果物として、「ＵＤの視点を取り入れた授業づくりハンドブック」を作成した。平成２５年４月に県内の全教員に配布し、役に立ててもらう予定である。山形県教育センターにおける研修講座や出前講座等、様々な場面で活用し、調査研究の普及還元を図っていきたい。また、今後も学校に研究協力を依頼し、ともに研究を進めていければと考える。その中で、いろいろな意見や批判等をいただきながら、ハンドブックのアップデートに取り組んでいきたい。「ＵＤの７つの視点一覧表」に最終完成型はない。大事なことは、「学級の実態に応じて考えること」、「教員一人一人が自分で大切にしたＵＤの視点を持つこと」である。

最後に、本研究において貴重な御助言を賜りました、研究協力者の植草学園短期大学主任教授の佐藤愼二氏に厚く御礼申し上げ、研究担当者会で御指導いただいた先生の言葉を載せてまとめとしたい。

「何かを変えていこうとする時には、３つの改革が必要といわれている。それは、制度改革と組織改革と意識改革である。この研究は、ＵＤの視点を入れることで、「授業」づくりの意識を変えることになる。すなわち、最後の部分の改革をどうしようか、というところに目を向けているという点で大きな意味がある。見方を変えて、支援を変える。支援を変えて、子どもを変えるということ。普段の授業づくりの延長線上に、ＵＤの視点を加味することで、配慮を要する子どもも包括される授業の実現を追究する。それは、結果的には、通常の学級における特別ではない支援教育を実現していくことである。ＵＤを示すことによって、授業を改善するという意識改革に目を向けることに意味がある。」

引用文献

１）山形県教育委員会 2011『山形の教育「いのち」そして「まなび」と「かかわり」第５次山形県教育振興計画 後期プラン〔平成２３－２７年度〕』，pp.30-31

２）相澤雅文 牛山道雄 田中道治 藤岡秀樹 丸山啓史 2011『教員志望の学生のための特別支援教育ハンドブック』京都教育大学附属教育実践センター機構 特別支援教育臨床実践センター，p.53

３）山形県企画振興部企画調整課『ユニバーサルデザイン・バリアフリー』（2013.2.8 現在），http://www.pref.yamagata.jp/ou/somu/020050/kikaku/ud/universaldesign.html

４）東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟 2010『通常学級での特別支援教育のスタンダード自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方』東京書籍，p.5 p.22 p.27 p.29

５）中央教育審議会 2005『特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）』文部科学省，pp.5-6

６）文部科学省 2008『小学校学習指導要領』，p.16

７）文部科学省 2008『中学校学習指導要領』，p.18

８）文部科学省 2009『高等学校学習指導要領』，p.22

９）文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 総則編』東洋館出版社，pp.57-59 pp.61-62

10）文部科学省 2008『中学校学習指導要領解説 総則編』ぎょうせい，pp.57-58 pp.61-64

11）文部科学省 2008『高等学校学習指導要領解説 総則編』東山書房，pp.74-78

12）文部科学省 2010『生徒指導提要』，まえがき　p.1 pp.23-24

13）山形県教育センター 2003『変化する子どもと信頼関係を築く学級経営の研究～「新しい荒れ・学級崩壊」未然防止の手立て～』（研究報告書第69号），p.9 p.24

14）山形県教育庁義務教育課 2007『クラスでできる支援ヒント集～通常の学級での配慮ある指導を目指して～』，pp.2-5

15）山形県教育センター 2010『単元を構成する力を付け、授業力を高める授業研究ハンドブック』，pp.52-53

16）全日本特別支援教育連盟 編 佐藤愼二 漆澤恭子 責任編集 2010『通常学級の授業ユニバーサルデザインー「特別」ではない支援教育のためにー』日本文化科学社，pp.14-17 p.37 pp.40-49

17）大沼直樹 瀧本一夫 2007『特別支援教育コーディネーターの基本的姿勢と実際ーコーディネーターを目指す教師のためにー』明治図書，pp.60-61

18）花熊曉 編著 高槻市立五領小学校 著 2011『通常の学級で行う特別支援教育 1 〈小学校〉ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり』明治図書，pp.17-28

19）阿部利彦 2006『発達障がいを持つ子の「いいところ」応援計画』ぶどう社，pp.78-80

20）授業のユニバーサルデザイン研究会　桂聖 廣瀬由美子 編著 2012『授業のユニバーサルデザインVol.5「全員活動」の文学の授業づくり』東洋館出版社，p.1 p.60

参考文献

１）学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議 2001『学習障害児の指導について（報告)』

２）２１世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議 2001『２１世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告)』

３）特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議 2003『今後の特別支援教育の在り方について（最終報告)』

４）文部科学省 2004『小･中学校におけるＬＤ（学習障害)、ＡＤＨＤ（注意欠陥／多動性障害)、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案)』

５）中央教育審議会 2005『特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申)』

６）文部科学省初等中等教育局長 銭谷眞美 2007（１９文科初第１２５号 平成１９年４月１日付け)『特別支援教育の推進について（通知)』

７）山形県教育庁義務教育課 2007『クラスでできる支援ヒント集 ～通常の学級での配慮ある指導を目指して～』

８）山形県教育センター 2001『ＬＤ児、ＡＤＨＤ児等の支援の在り方についての研究 中間報告』

９）山形県教育センター 2002『ＬＤ児、ＡＤＨＤ児等の支援の在り方についての研究 中間報告（２年次)』

10）山形県教育センター 2003『ＬＤ児、ＡＤＨＤ児等の支援の在り方についての研究 最終報告』

11）山形県教育センター 2003『変化する子どもと信頼関係を築く学級経営の研究 ～「新しい荒れ・学級崩壊」未然防止の手立て～』

12）山形県教育センター 2010『単元を構成する力を付け、授業力を高める授業研究ハンドブック』

13）山形県教育センター 2011『授業研究ハンドブック(高等学校版)』

14）東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫 悟 2010『通常学級での特別支援教育のスタンダード自己チェックとユニバーサルデザイン環境の作り方』東京書籍

15）佐藤愼二 2008『通常学級の特別支援 ―今日からできる！４０の提案―』日本文化科学社

16）佐藤愼二 2010『通常学級の特別支援セカンドステージ ―６つの提言と実践のアイデア５０―』日本文化科学社

17）宇野宏幸 他 2010『発達障害研究から考える通常学級の授業づくり ―心理学，脳科学の視点による新しい教育実践』金子書房

18）児童心理 2009 年１２月号臨時増刊No.906『通常学級で使える 特別支援教育 実践のコツ』金子書房

19）上野一彦 2006『ＬＤ(学習障害)とディスレクシア(読み書き障害)』講談社＋α新書

20）杉山登志郎 2007『発達障害の子どもたち』講談社現代新書

21）杉山登志郎 2011『発達障害のいま』講談社現代新書

22）中邑賢龍 2007『発達障害の子どもの「ユニークさ」を伸ばすテクノロジー』中央法規

23）佐藤曉 2008『―特別な支援が必要な子どもたちへ４ ―特別支援教育コーディネーターの手引き』東洋館出版社

24）佐藤曉 守田暁美 2009『子どもをつなぐ学級づくり』東洋館出版社

25）佐藤曉 2012『どの子もこぼれ落とさない授業づくり４５ これからの特別支援教育の話をしよう』岩崎学術出版社

26）長澤正樹 編集 2011『現代のエスプリ５２９ 特別支援教育 平等で公平な教育から個に応じた支援へ』ぎょうせい

27）筑波大学附属大塚養護学校 編 2006『子どもと家族を支える特別支援教育へのナビゲーション』明治図書

28）安部博志 2010『がんばれ先生シリーズ６ 発達障害の子どもの指導で悩む先生へのメッセージ ―結い廻る：つながっていきましょ！―』明治図書

29）阿部利彦 2010『発達が気になる子のサポート入門 ―発達障害はオリジナル発達』学研新書
30）会沢信彦 曽山和彦 編集 2008『３ステップであんしん 気になる子への対応術』教育開発研究所
31）梅原厚子 2009『イラスト版発達障害の子がいるクラスのつくり方 これが基本 子どもが困らない３５のスキル』合同出版
32）小林正幸 2003『不登校児の理解と援助 問題解決と予防のコツ』金剛出版
33）柘植雅義 他編著 2007『自立をめざす生徒の学習・メンタル・進路指導 中学・高校におけるＬＤ・ＡＤＨＤ・高機能自閉症等の指導』東洋館出版社
34）廣瀬由美子 桂聖 坪田耕三 編著 2009『―特別な支援が必要な子どもたちへ５― 通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン ―国語・算数授業に特別支援教育の視点を取り入れた「わかる授業づくり」―』東洋館出版社
35）桂聖 2011『国語授業のユニバーサルデザイン 全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』東洋館出版社
36）授業のユニバーサルデザイン研究会 編著 2010『授業のユニバーサルデザインVol.1 全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』東洋館出版社
37）授業のユニバーサルデザイン研究会　桂聖 廣瀬由美子 編著 2010『授業のユニバーサルデザインVol.2「全員参加」の国語授業づくり』東洋館出版社
38）授業のユニバーサルデザイン研究会　桂聖 廣瀬由美子 編著 2011『授業のユニバーサルデザインVol.3「全員参加」の国語・算数の授業づくり』東洋館出版社
39）授業のユニバーサルデザイン研究会　桂聖 廣瀬由美子 編著 2012『授業のユニバーサルデザインVol.4「全員参加」の説明文の授業づくり』東洋館出版社
40）授業のユニバーサルデザイン研究会 監修　桂聖 廣瀬由美子 編著 2012『授業のユニバーサルデザインVol.5「全員活動」の文学の授業づくり』東洋館出版社
41）授業のユニバーサルデザイン研究会 監修　桂聖 廣瀬由美子 編著 2012『授業のユニバーサルデザインを目指す 国語授業の全時間指導ガイド １年 ―特別支援教育の視点をふまえた国語授業づくり―』東洋館出版社
42）日本ＬＤ学会 2010『ＬＤ研究 第１９巻 第１号、第２号、第３号』
43）日本ＬＤ学会 2011『ＬＤ研究 第２０巻 第１号、第２号、第３号』
44）日本ＬＤ学会　第20回大会＜発表論文集＞ 2011
45）文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 編集 2011『季刊 特別支援教育 No.42』東洋館出版社
46）上野一彦 他 編集 2011-2012『ＬＤ＆ＡＤＨＤ ４，７，１０，１月号』明治図書
47）特別支援教育の実践研究会 編 2012『特別支援教育の実践情報 No.146』明治図書
48）全日本特別支援教育研究連盟 編 2011『特別支援教育研究 ４月号－１１月号』東洋館出版社
49）全日本特別支援教育研究連盟 編 2011『特別支援教育研究 １２月号 特集 保存版 通常学級の授業ユニバーサルデザイン』東洋館出版社
50）全日本特別支援教育研究連盟 編 2012『特別支援教育研究 １月号－２月号』東洋館出版社
51）『月刊 実践障害児教育 ９，１０，１２月号』2011 学研
52）『月刊 学校教育相談 １１月号』2011 ほんの森出版
53）国立特殊教育総合研究所 2006『小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒の指導に関する研究 ―ＬＤ，ＡＤＨＤ等の指導法を中心に―』
54）国立特別支援教育総合研究所 2010『小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究』
55）文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 2012『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』
56）全日本特別支援教育連盟 編 佐藤愼二 漆澤恭子 責任編集 2010『通常学級の授業ユニバーサルデザイン－「特別」ではない支援教育のために－』日本文化科学社

巻末資料

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに関する調査（まとめ）

山形県教育センター

このたびは、平成２３～２４年度山形県教育センター調査研究「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」の研究協力校としてご協力をいただき、深く感謝申し上げます。

本研究では、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」の定義を、「すべての児童生徒がわかる喜びや学ぶ意義を実感できるために、配慮を要する児童生徒には『ないと困る支援』で、他の児童生徒にも『有効な支援』を、学級の実態、各教科等の特性、指導場面等に合わせて工夫した授業づくり」とし、小学校・中学校・高等学校の授業改善や校内研究においてどのように活用できるか、その内容と方法について探ってまいりました。

本調査は、今年度の貴校における研究実践のまとめとして、年度初と現在において先生方が感じた指導上の困難さや具体的な取組みの状況について比較し、児童生徒の変容、授業改善や校内研究に取り入れてみた感想などについて考察し、県内の学校に還元していくための資料とするものです。

前回の調査項目と一部変更した項目がございますが、本調査の趣旨をご理解いただき、ご回答くださいますようお願い申し上げます。

［記入についてのお願い］
1　この調査の回答は、調査票の配付を受けた通常の学級を担任している先生（教科担任も含む）ご本人がご記入ください。
2　回答は、すべてこの調査用紙に直接ご記入ください。
3　問１から順にお答えください。
4　回答は、該当する記号に○をつけるものと記号や文章で回答するものがあります。文章で回答する場合は、できるだけ具体的にお書きください。

1　回答者の基礎データ

(1)　性別

ア　男性　　イ　女性

(2)　教職年数

ア　５年以下　　イ　６年～１０年　　ウ　１１年～２０年
エ　２１年～３０年　　オ　３１年以上

(3)　現在担任している学年　（　　）年

(4)　担当学級の児童生徒数　（　　）人

2　先生は、学級づくりや授業づくりにおいて、指導の困難さを感じる児童生徒が増えてきていると思いますか。年度初と現在、それぞれの時点の思いについて記号を選んでください。

ア　とても思う　　イ　ある程度思う　　ウ　あまり思わない　　エ　思わない

年度初	現　在

3　２において、年度初と現在とで、指導上の困難さについて変化を感じていますか。変化を感じている場合には、その違いについて具体的にお書きください。

4　学級づくりや授業づくりにおいて、「どの児童生徒も『わかる、できる』姿」を目指すために、どのようなことに取り組んでいますか。以下の点に留意してご記入ください。

(1)　Ⅰ～Ⅶの観点にある各項目について、年度初と現在の取組みの状況についてＡ～Ｃから選んでご記入ください。

Ａ：よく取り組んでいる　　Ｂ：時々取り組んでいる　　Ｃ：あまり取り組んでいない

(2)　現在の取組みでＡを選んだ項目について具体的に取り組んでいることを**【具体的な取組み】**の欄にお書きください。

Ⅰ　教室環境		年度初	現　在
例	整理の仕方や置き場所を決め、教室の整理整頓に心がけている。	B	A
■学級担任			
①	整理の仕方や置き場所（個人ごと・学級ごと・教科ごと、表示など）を決め、教室の整理整頓の仕方を指導している。		
②	児童生徒の実態に合わせた座席の位置を決めて指導している。		
③	学習時の視覚刺激の量に配慮している。（前面の黒板とその周囲、壁面の掲示物の精選など）		
④	一週間や一日の予定などのスケジュールを見やすく掲示して指導している。		
⑤	急な連絡や予定の変更（事前や当日）は、口頭だけでなく、視覚的にもわかるように配慮して伝えている。		
■学級担任　■教科担任　共通			
⑥	児童生徒の実態に合わせた座席の位置を決めて指導している。		
⑦	学習時の視覚刺激の量に配慮している。（前面の黒板とその周囲、壁面の掲示物の精選など）		

【具体的な取組み】

Ⅱ　学習や生活のきまり		年度初	現　在
■学級担任			
①	学習活動のきまりをわかりやすく定め、指導している。（「聞くこと」「話すこと」「書くこと」など）		
②	学級生活のきまりをわかりやすく定め、指導している。（時間のきまり、清掃や昼食時のきまりなど）		
③	身の回りの整理整頓について、わかりやすく指導している。		
④	①②③について、児童生徒の実態を振り返り、必要に応じて見直しを図りながら指導している。		
■学級担任　■教科担任　共通			
⑤	担当教科の学習活動のきまりは、学級・学年・学校のきまりを踏まえ、わかりやすく指導している。		

【具体的な取組み】

Ⅲ　関係づくり		年度初	現　在
■学級担任			
①	児童生徒の理解、児童生徒同士の関係の把握に心がけ、観察・記録を大切に指導している。（ＮＲＴ、Ｑ－Ｕなど）		
②	児童生徒同士が学級のことや友だちのことについて話し合える場を作ったり、話し合える工夫をしたりしている。		
③	時・場・相手などに応じたコミュニケーションの仕方やマナーについて指導している。（あいさつ、返事、お礼など）		
④	児童生徒のトラブルや問題について、本人又は保護者との相談を通し、その望ましい在り方を指導している。		
■学級担任　■教科担任　　共通			
⑤	教科のねらいを達成するために、学級ごとの特性を把握して指導している。		

【具体的な取組み】

Ⅳ　授業の構成		年度初	現　在
■学級担任　■教科担任　　共通			
①	単元や本時などで、学習の流れを提示し、児童生徒が見通しを持ち学習に取り組めるようにしている。		
②	教科書、ノートやファイル、学習用具の準備について指導している。		
③	導入の段階で、本時の課題につなげる工夫をしている。（前時の復習、動機付けなど）		
④	わかりやすく主体的に取り組めるような課題設定を行い、自力解決のための思考の手がかりを持たせている。		
⑤	展開の段階で、中核となる学習活動とそれに付随する学習活動のバランスや軽重を意識して進めている。		
⑥	ペア学習、グループ学習など、ねらいに応じてさまざまな学習の形態を工夫している。		
⑦	集中力を高めたり気分を切り替えたりする活動を取り入れるなどして構成を工夫している。		
⑧	終末の段階で、「わかった、できた」という満足感・達成感を実感できるまとめの活動を工夫している。		

【具体的な取組み】

Ⅴ　教師の話し方、発問や指示		年度初	現　在
■学級担任　■教科担任　　共通			
①	児童生徒のがんばりを認め、肯定的な表現で話しかけている。		
②	全体への発問・指示と個別の声がけ・確認などの支援の仕方を工夫している。		
③	話し始める前に、児童生徒の興味を惹く工夫をしている。（立つ位置、タイミング、前置きなど）		
④	児童生徒に伝わる発問や指示になるように工夫している。（簡潔な表現、具体的な言葉など）		
⑤	複数の発問や指示の仕方を準備し、五感に働きかけるように工夫している。		

【具体的な取組み】

Ⅵ　板書、ノートやファイル		年度初	現　在
①	教室の後ろの児童生徒からも見えるような文字の大きさ、行間にしている。		
②	大事なところがわかるように工夫して示している。（チョークの色、ラインや囲み、矢印や記号の活用など）		
③	児童生徒が理解し、書き取りやすいような板書の仕方を工夫している。（スピード、タイミング、間など）		
④	授業の流れや内容がわかるように板書計画を工夫している。		
⑤	ノートの取り方やファイルの活用の仕方を指導している。		

【具体的な取組み】

Ⅶ　教材・教具		年度初	現　在
①	わかりやすい教材・教具を使っている。（具体物、写真、絵、ＩＣＴ、視聴覚機器など）		
②	児童生徒の実態に合わせて、材料、道具、用具を準備して活用している。		
③	ワークシートや課題プリントは、読みやすく書きやすいように工夫している。		
④	児童生徒の実態に合わせて、対応できるような教材を準備している。（基礎や応用、発展など）		

【具体的な取組み】

5　「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」に取り組んでみて、児童生徒に変容していることがありましたら、具体的にお書きください。

6　「ユニバーサルデザインの視点」を授業改善や校内研究に取り入れてみた感想について、具体的にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

アンケート協力校

（平成２３年度）

山形市立東小学校	山形市立南沼原小学校	上山市立東小学校
天童市立天童北部小学校	大石田町立大石田南小学校	大石田町立大石田北小学校
新庄市立日新小学校	戸沢村立戸沢小学校	南陽市立赤湯小学校
鶴岡市立朝暘第六小学校	庄内町立立川小学校	
山形市立第四中学校	山形市立第十中学校	上山市立宮川中学校
天童市立第二中学校	大石田町立大石田中学校	新庄市立日新中学校
戸沢村立戸沢中学校	南陽市立赤湯中学校	鶴岡市立鶴岡第一中学校
庄内町立立川中学校		
県立山形中央高等学校	県立山辺高等学校	県立北村山高等学校
県立新庄北高等学校（全）	県立新庄北高等学校（定）	県立新庄北高等学校最上校
県立米沢工業高等学校（全）	県立米沢工業高等学校（定）	県立置賜農業高等学校
県立小国高等学校	県立庄内総合高等学校	県立遊佐高等学校

実践協力校

（平成２４年度）

寒河江市立西根小学校	米沢市立南原中学校	大石田町立大石田中学校
県立山添高等学校	県立山辺高等学校	県立鶴岡高等養護学校

研究協力者

（平成２４年度）　植草学園短期大学　福祉学科児童障害福祉専攻　主任教授　佐藤　慎二

調査研究担当者

第１年次（平成２３年度）		第２年次（平成２４年度）	
	○……主担当		○……主担当
○特別支援教育課長	山下　敦	○特別支援教育課長	五十嵐　隆夫
指導主事	大内　慎之助	教育相談課長	小林　由美子
指導主事	小山田　芳春	主任指導主事	中村　純一
指導主事	鬼海　武俊	指導主事	大内　慎之助
指導主事	齋藤　真	指導主事	小山田　芳春
指導主事	高野　浩男	指導主事	齋藤　真
指導主事	髙橋　真琴	指導主事	佐藤　和明
指導主事	津藤　洋一	指導主事	津藤　洋一
指導主事	福井　智之	指導主事	福井　智之
指導主事	森　美千子	指導主事	吉田　卓哉
長期研修生	工藤　清充	長期研修生	髙橋　留美子
長期研修生	槙　靖子		
長期研修生	和田　朋子		

発　行　　平成２５年３月
発行者　　山形県教育センター
　　天童市大字山元字犬倉津 2515
　　ＴＥＬ　023（654）2155
　　ＵＲＬ　http://www.yamagata-c.ed.jp
印刷所　　株式会社 大風印刷　天童営業所
　　天童市東久野本一丁目１番 45 号
　　ＴＥＬ　023（654）5715